池窪弘務作品集十一　二〇一三年（六十七歳）

閉ざされた森の神話（童話）

星と泉１３号（２０１３年）

一　戸沢家の人々と一匹と一羽

亜夢は七歳の女の子だ。元気なおばあちゃんと、トマトを作っているおじいちゃんと住んでいる。おじいちゃんは、トマト作りの名人だ。ハウス栽培ではなくて、太陽の光が十分に当たる自然な土で作る。土を耕し、肥料を混ぜて元気な土を作る。それで初めて立派なトマトができるんだ。あなたも温室で育てられるより、自然の中でのびのび育った方が楽しいだろう。

おじいちゃんは、一個千円もするトマトを作る。そのために、千の手間をかける。

父と母は三年前に離婚した。亜夢は三人で暮らしたことを、ほとんど覚えていない。一月に一回、三人一緒にレストランでご飯を食べる。とても仲良しに見える父と母が、どうして別れたのだろうと亜夢は不思議に思う。

「亜夢ちゃん、学校に行こう」

と、カラスのカーが土塀の上で鳴くと、続いて、

「亜夢ちゃん、学校に行こう」

と、良太の声がする。カーは良太の言葉を覚えてしまったのだ。

穏やかな秋の朝。猫のタマは日向で丸くなっている。タマは不思議な猫だ。明日を夢で見ることができるのだ。昨日、サンマの骨を食べている夢を見た。今朝、おばあちゃんがサンマの骨をくれた。だけど、タマが明日を夢で見ることができるなんて、誰も知らない。

カーがタマの横で遊んでいる。タマとカーは仲良

しだ。カーがタマをくちばしでつついても、タマは怒らない。気持ちよさそうに目を細めている。

二　森に行ってはいけない

家の近くに小さな森がある。良太と亜夢は、森をぐるーっとまわって学校へ行く。森の道をまっすぐに行けば、近道なのにと亜夢は思う。でも、おじいちゃんとおばあちゃんから、森へ行ってはいけないと、きつく言われている。

「なぜ？」

と、亜夢が聞くと、おじいちゃんは、「言い伝えだから」と、言った。

おばあちゃんは、「女の子が神隠しにあったんだよ」と、言った。

「神隠しって？」

亜夢がきいた。

「森に入ったきり帰ってこなかったんだよ」

おばあちゃんが言った。

「十年が過ぎて帰ってきた」

おじいちゃんが口をはさんだ。

「神隠しにあったときと少しも変わっていなかった。着ていた服も、年も七つのままだったのよ」

おばあちゃんは言った。

「言い伝えだよ」

おじいちゃんはお酒を飲みながら言った。

不思議なことに亜夢は、森が少しも怖くなかった。その子は十年もどこに行っていたのだろう。その方が興味があった。

昨日の夜は、森のことをいろいろと考えて、よく眠れなかった。だから、今朝は寝坊をしてしまった。おじいちゃんは畑に出かけ、おばあちゃんは亜夢のご飯を用意すると、庭の落ち葉を掃いていた。

「あっ」

おばあちゃんは声を上げた。亜夢が飛び出してく

るのと同時だった。
「亜夢、良太君は今日は風邪でお休みだって」
亜夢は食パンをくわえたままうなずいた。
「やれ、やれ」
おばあちゃんは、竹箒の柄に顎を乗せて、亜夢のうしろ姿を見送った。
道には学校へ行く友達の姿はない。
遅刻……。今まで一度も遅刻したことがないのに。亜夢は半泣きになった。そのとき、目の前に森の道が飛びこんできた。亜夢はすいこまれるように森に入った。
森の道には何も変わったものはなかった。少し落ち葉が多いかなあと亜夢は思った。森は静まりかえっていた。鳥の声も羽ばたきも聞こえない。目の前に白いものが落ちてきた。雪だ。冬はまだまだなのに。
「亜夢ちゃん」
後ろから声をかけられた。ふり向くと良太がいた。良太の足もとにタマがいる。
「亜夢ちゃん」
声がする方を見ると、枝にカラスのカーがいる。
「どうしたの良太君。風邪でお休みじゃなかったの？」
「それは亜夢ちゃんじゃないの」
「わたしは風邪をひいていないわ」
「そうか、よく分からないけど、それじゃあよかった」
「雪がふってきたね」
「雪じゃないよ。だって冷たくないもん。寒がりのタマも元気だよ」
「ここは寒くないからよ」
タマが喋った。タマが喋った……。
「おはよう」
足もとで声がした。二人が下を見ると、小さな紫色の花が咲いていた。見たこともない花だった。

「花も喋った」
良太が叫んだ。
「おはよう」
亜夢はしゃがんで花に声をかけた。
「おはよう」
花が言った。
「みんな喋るんだ」
亜夢は言った。
「そうだよ。花や木も動物もみんな喋るんだ。それだけじゃない。風や光や水もね。水はいろんな姿がある。氷のときはすごく無口だけれどね。それでも、みんな喋る。それと、君たちは森を出ると、森での出来事はみんな忘れてしまう」
頭の上から声がした。
「忘れてしまうというのは正しくないなあ。森では違う時間が流れているんだ。白い小さな粒は時間だよ。うーん……。それも違うなあ。忘れてしまうことを言っても仕方がないのかなあ」
見上げると、大きな木が、枝を腕組みして考えていた。
―雪ではなくて時間？　ここでは時間が見えるんだ―。
次の言葉を待っていたけれど木はだまってしまった。仕方なく、二人と一匹と一羽は、森の道を歩き始めた。
「それも正しくないなあ」
後ろで木の声がした。ふり返ったけれどその後の言葉はなかった。
しばらく行くと、森の出口が見えた。
「遅刻にならなかった。よかったね」
良太が言った
「遅刻にならなかった。よかったたね」
カラスのカーが言った。
「カーも自分の言葉を喋りなさい」
と、亜夢が言った。

「おなかがすいたよ」
カーはそう言って、飛んで行ってしまった。
歩いていく方向には明るい光があふれていて、学校に向かう生徒の姿が見えた。

三　少し違う

授業は、いつもと変わりなく始まった。
「みんなおはよう」
後藤先生が教室に入ってきた。
「おはようございます」
と、生徒が声をそろえる。後藤先生は「起立、礼」をやらない。みんなの笑顔があれば十分よと言う。
後藤先生はきれいと思う。亜夢も後藤先生のような大人になりたい。先生になって、子供たちを教える。この前は、大人になったらやりたい仕事に、「ケーキ屋さん」って言ったけれど、今度は「先生」にしよう。でも、後藤先生に、「どうして？」って聞かれたら、はずかしいかなあ。
「一時間目は図画です」
「えっ」
思わず亜夢は声をあげた。
―一時間目は音楽のはず。クレヨンなんか持ってきていない―
亜夢以外の生徒は、さっさとクレヨンを出している。
―どうしよう。クレヨン……。ランドセルを開けたって。えっ、あるわ、クレヨンが―
「亜夢ちゃん、花壇へ行こう」
仲良しの七海ちゃんが、さそいに来た。
―わたしの勘違いだったんだ―
亜夢は胸をなでおろした。
亜夢は花壇の花をかかずに、フェンスの近くに咲いている黄色い花をかこうと思った。仲間はずれで、かわいそうな気がしたからだった。

「オミナエシね」
ふり向くと、後藤先生がいた。とてもいいにおいがした。
「秋の七草の一つよ。花言葉はやさしさ、純真」
「じゅんしん？」
「亜夢ちゃんみたいに素直な心よ。もう先生にはないなあ」
先生はふっと笑って、少し長めのため息をついた。
「がんばってね」
亜夢の肩を、ぽんとたたいて、他の生徒の方に行ってしまった。
「亜夢ちゃん、摘んで家に持って帰ったら。でも、雑草でしょ」
隣の七海ちゃんが言った。亜夢は強く首を横にふった。モンシロチョウが、一番多く舞っているのは、花壇の花ではなくて、オミナエシの花だった。亜夢は花だけじゃなくて、モンシロチョウを一つ二つと、かきこんでいた。
「モンシロチョウはかわいそうだよ」
オミナエシの葉っぱにとまっていたテントウムシが言った。
「冬が来るからね」
テントウムシが言った。
「かわいそうって……」
七海ちゃんが言った。かすかにテントウムシの声は、七海ちゃんにも聞こえた。でも、テントウムシが喋ったなんて、七海ちゃんは、思いもしなかった。

四　森に行けば一つ変わる

朝ご飯にいつもトマトが一つついている。トマトはとてもおいしい。毎日食べてもあきない。でも秋が深まると、収穫は終わる。また春に備えての土作りが始まる。
昨日は、森に入った瞬間は覚えているが、いつの

間にか、校門の前に良太君と立っていた。そして、テントウムシが喋った。亜夢だけに聞こえたのではない。七海ちゃんも、

「かわいそうって……」

と、首をかしげたのだった。でも、それはテントウムシのことだろうか？　テントウムシが喋ったと亜夢が言うと、七海ちゃんは、不思議そうな顔をして、亜夢を見ていたから。

「おばあちゃん、テントウムシって喋るの？」

縫い物をしていたおばあちゃんは、ちょっと針をとめて、

「そりゃあ、喋るよ」

と言った。

「ただね、人には聞こえないだけだよ」

「わたしは聞いた」

「そうかね、亜夢にはテントウムシの声が聞こえるのかしら」

おばあちゃんは、楽しそうに笑った。

二人の横でタマが、明日の夢を見ていた。森の道を歩いていく。良太や七海ちゃんもいる。カーもいる。楽しそうな声が聞こえてくる。遊園地だ。タマは行ったことがないけれど、亜夢ちゃんの絵本で見たことがある。三人と一匹と一羽は、回転木馬を見ていた。木馬に乗っているのは……。

「ニャーン」

突然目がさめた。カラスのカーが、タマの頭をくちばしでつついた。

五　森の番人

「亜夢ちゃん、遊ぼう」

七海ちゃんと良太の声がした。今日は日曜日だ。学校も好きだけれど、友達と遊ぶ日曜日も亜夢は好きだ。朝一番から畑に出ていたおじいちゃんが帰っ

てきた。
「おはよう」
「おはようございます」
三人が声をそろえた。
「みんなお利口さんだね」
おじいちゃんは、取り立てのトマトを一個ずつ三人に渡した。渡すときに一人ずつの頭をなでた。
「ありがとう」
一人ずつお礼を言った。
森の道の前にさしかかると、森の方から、「面白いぞ、面白いぞ」
と言う声が聞こえる。三人は声に誘われるように森に入った。
七海ちゃんは六月に転校してきた。良太はお父さんもお母さんも働いていて、おじいちゃんやおばあちゃんはいない。多分、森の言い伝えを知っているのは亜夢だけだった。でも、亜夢は言いそびれた。
森の道にタマがいた。歩きながら、
「面白いよ、面白いよ」
と言っている。タマの背中にカラスのカーがいる。カーも
「面白いぞ、面白いぞ」
と言っている。
「森の遊園地に行こう」
カーが言った。
「遊園地があるの？」
七海ちゃんが言った。
「面白そうだ」
良太が言った。そのとき、ガサッと音がした。
音の方向を見ると、金色に輝く大きな狐が三人を見ていた。そして、くるりと体を反転させた。太くてながーい尾っぽだ。カーが狐の背中にとまった。真っ黒なカーの羽根が金色に輝いた。金狐は急に立ち止まり、亜夢の方に体を回転させた。
「ここからは遊園地への道だ。俺は森の番人だ。た

だで通すわけにはいかない。無理に通るなら食ってしまうぞ」
狐の口が耳まで裂けた。三人とも悲鳴をあげた。
亜夢は、ふるえる手でトマトをさし出した。
「ほお、トマトか」
―狐がトマトを食べるだろうか？―
「これはうまそうだ。みんな一つずつ置いて行きな。カラスと猫はおまけで通してやる。みんな遊園地を楽しみな」

六　今日は、速めに木馬をまわして

狐があけた道の奥から、音楽が聞こえてきた。楽しい行進曲だ。音楽はドンドン近くなる。
「メリーゴーランドだ！　わたし、乗ったことがある」
七海ちゃんが叫んだ。亜夢は乗ったことがなかった。
「よく見ろよ」
いつの間にか金狐がそばにいた。
「乗っているのが、誰か分かるかね」
亜夢には、誰も木馬に乗っていないように見えた。
「よく見るんだよ。白い木馬には風の子」
亜夢が白い木馬を見つめると、子供のりんかくがうっすらと見えた。
「見えた。風が吹いているね」
良太が言った。
「次は銀の馬だ。銀の馬には光の子が乗っている」
これは、キラキラしていたから分かりやすかった。
「青い馬には水の子供だよ」
水の子供には、小さな波が見えた。
「それぞれの森から遊びに来ているんだ」
「風の森、光の森、水の森、他にもたくさん森がある。闇の森、鏡の森、影の森。恐ろしい森もある」
「こわい！」

三人は同時に言った。
「まあ、トマトを持ってくれれば俺様が守ってやる。それはそうと、木馬をまわしているのは誰だと思う」
「機械」
良太が言った。
「馬だよ。森の外で死ぬまで働いて、死んだら食べられてしまった。肉は人間に食べられて、内臓は鳥や獣に食べられた。みんなの栄養になって、馬はこの森にやってきた」
「ぜんぶなくなっても」
七海ちゃんが言った。
「そうだよ。ぜんぶなくなって、馬神になった」
「馬神？」
亜夢が言った。
「木馬をまわしているのは馬神だよ。正確に言うと、木馬のひとつひとつが、馬神なんだ」
「かわいそう」
亜夢が言った。
「いいや、馬神は幸せになったんだ。子供を乗せて、ぶんぶんまわるんだぜ」
金狐が言った。
「ぼくも乗りたい」
良太が言った。
「いいよ乗せてやる」
金狐の言葉と同時に木馬はとまった。
三人を乗せると、木馬は静かにまわり始めた。
「今日は、速めに木馬をまわして」
亜夢の前で声がした。風の子供か、光の子供か、水の子供か亜夢には分からなかった。
「今日は、速めに木馬をまわして」
また声がした。木馬は、速くまわり始めた。本当の馬に乗っているみたいだった。木馬はいないて立ち上がる。みんな必死にたづなをつかんだ。
ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラ

キラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。

木馬は、森の木々の間を通りぬけ、そっと、とまった。

七　フレンチトースト

一月に一回、亜夢は両親に会う。日曜日に動物園に行ったこともあるが、今はほとんどが食事だった。今日も夕方から食事だった。おばあちゃんが、駅まで送ってくれた。

「帰りは、お母さんが送ってくれるからね」

おばあちゃんは亜夢の頭をなでた。

都心へ行く電車は乗客もまばらだった。一人旅はドキドキする。亜夢は靴を脱いで、暮れていく外の景色を眺めた。家の灯りがきれい。どんな人が住んでいるのだろう？　時々、すれ違う電車は、いっぱい人が乗っていた。みんなお家へ帰って行くのだ。

お母さんは、いつもの改札口で待っていた。会うとすぐに、亜夢の手を握った。亜夢の目線に腰を下ろして、

「元気？」

と聞いた。亜夢がうなずくと、手を愛おしそうに自分のほおにあてた。お母さんは亜夢に会うといつもそうする。二人は、普通の親子のように人ごみの中を、手をつないで歩いた。

ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラキラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。

「どうしたの？」

お母さんは聞いた。

「ううん、なんにも」

亜夢は、強くお母さんの手をにぎった。

レストランで、お父さんが待っていた。
亜夢はジュースで、大人はワインで乾杯をした。
その後、お母さんから、赤いマフラーをプレゼントされた。亜夢は首にまいた。
「とてもよくにあうよ」
お父さんが拍手した。お父さんからのプレゼントはディズニーの絵本だった。
「ありがとう」
と亜夢は言った。お父さんとお母さんは、お互いの仕事の話を少しした。亜夢は学校のことを聞かれた。
「学校は慣れた？」
お母さんが聞いた。
「うん」
「いじめっ子はいないか」
お父さんが言った。
「いない」
「勉強は楽しい？」
お母さんが聞いた。
「楽しい」
料理が次々に運ばれてきた。亜夢はキッズメニューで量は少ないが、大人と同じものだった。最後に食パンが出てきた。
「どんなご馳走だって、このパン以上のものはない。日本人がお茶づけやおにぎりが一番おいしいって思うように、フランス料理で最高はフレンチトースト」
お父さんが言った。お母さんもうなずいた。いつもは、料理の最後はとても甘いデザートだった。でも、今夜はトースト。亜夢はフレンチトーストが、あまり好きじゃない。食パンは、朝におばあちゃんが焼いてくれる、何もついていないトーストの方がいい。でも、黙っていた。少しお父さんとお母さんは変わったと思う。駅に向かって三人で歩いていたけれど、いつの間にかお父さんはいなくなった。
「お父さんは？」

「お仕事が忙しいんでしょ」
お母さんが言った。
「森に行けば一つ変わる」
誰かが耳もとでささやいた。
ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラキラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。
お母さんが亜夢を家まで送ってくれた。
帰りの電車の中で、亜夢は森のことを聞いた。
「お母さんが子供の頃も、森に行ってはいけないって、おじいちゃんやおばあちゃんに言われた？」
「森ね……」
お母さんは少し考えていた。
「忘れたわ」
と言った。
「テントウムシが喋った」
と、言おうと思ったが、亜夢は言葉をのみこんだ。

八　風の子

おじいちゃんが、亜夢と同じくらいの年の男の子と帰ってきた。二人は、カゴに入りきれないほどトマトを持っていた。
亜夢は、前にその子を見たことがあるように思った。亜夢が近づくと、ピューと風の音がした。
「この子が、トマトを取るのを手伝ってくれたんだよ」
おじいちゃんは、男の子の頭をなでながら言った。
「亜夢と同じ七才だ」
でも、こんな子は学校にいない。
「トマトを取るのは大人顔負けだ。丁度うまい具合に熟したトマトを、上手に選びよる」
「亜夢、一緒に遊んだら」
隣で話を聞いていたおばあちゃんが言った。

「暗くならないうちに帰っておいで」
「うん、すぐに帰るから」
亜夢が言った。
男の子は、はずかしそうに下を向いて歩いた。
「公園へ行く？」
亜夢が言った。男の子はうなずいた。歩きながら小石をけった。
「名前はなんていうの？」
「風太」
「学校に行っていないの？」
「行っていない。学校なんかないもん。俺、森に住んでいるんだ」
「森に住んでいるって……」
「俺は風の子なんだ。木馬は楽しかっただろう」
夢の中の出来事みたいに、亜夢は木馬のことを思い出した。
―そうだ、木馬に乗っていたんだ―
「木馬は、速くまわったもん」
風太が言った。
「馬神がまわしてくれたんだ」
亜夢は言った。
森の道の近くに来た。
「風の村に行こうよ」
「だけど時間が」
「大丈夫だよ。森の時間は違うから」
「森に行ってはいけないって」
「大丈夫、俺がきっちりお前を帰すから」
また、ピューと風の音がした。
森の道はくねくねまがっていたり、横道に入ったりした。
「一人で帰れないわ」
「大丈夫、送っていくから」
「日が暮れるまでに帰れるかしら」
「さっきも言ったろう。森の時間は違うって」
「どうして？　説明して」

「説明はできない。人間は何でも説明できると思っている。説明できないことの方がずっと多いのに」
「森に住んでいるって……」
「俺は風の子なんだ。木馬は楽しかった」
―そうだ、木馬に乗っていたんだ―
「木馬は、速くまわったもん」
「馬神がまわしてくれたんだ」
二人はまた同じ話をした。でもここは森の中なんだ。
歩いて行くと森が見えた。森の中に森がある。ざわ、ざわ、ざわと森が騒いでいる。
ピューと、風が吹いた。
「風の村だよ」
風太が言った。

九　風神

風の村には誰もいなかった。風太も姿を消した。ざわ、ざわという風の音。時々ピューという風の音。木の葉の揺れ。
「目で見ようとするから、見えないんだよ」
大きな声が聞こえてきた。
目を閉じると、木々の間を飛びかう風が見えた。後ろにいる風太も見えた。そして、森全体が、巨大な風の神様だった。
「わたしも見えたかね。この森はわたしだ。風の神、風神だ」
亜夢は、目を閉じると見える世界があるなんて知らなかった。風神は、風の袋を少し開けた。風が亜夢の体に当たった。強い風だ。亜夢は二、三歩後ずさりした。
「怖くないもん。風の神様は好きだよ」
「俺が怖くないなんて言う人間は、初めてだ。好きだなんて、初めて言われた」
風神は照れた。ほっぺが赤くなった。

「俺も風神が好きだよ。この森にはいろんな村がある。亜夢を連れて行きたい」
風太が言った。
「わたしも行きたい」
亜夢は言った。
「でも、今日は帰ろう。誰かが、来ているよ」
風太が言った。風神は、風の袋を少し開けた。亜夢は吹き飛ばされた。気がつくと家の前に立っていた。

十　新しいお父さん

「ただいま」
亜夢が玄関の戸を開けると、「お帰り」と、お母さんの声がした。
大きな靴がおいてある。
―お客さんが来ている。誰だろう―
お父さんの靴は、もう少し小さいと思う。それにお父さんは、紐の靴は嫌いだ。
「おや、はやかったね」
おばあちゃんが言った。柱時計を見ると、家を出たときから、十分もたっていない。居間に大きな背中が見えた。ふり向いて、ニコニコして、
「おじゃましています」
男の人は言った。
やさしそうな人だと、亜夢は思った。
「ちょっと二階に行ってて。話が終わったら呼ぶから」
お母さんは、明るい色のワンピースを着ていた。
亜夢が初めて見る服だった。
亜夢は二階に上がって、テレビをつけた。下で何の話をしているのだろう。亜夢は気がかりだった。
三十分ほどして、亜夢を呼ぶお母さんの声がした。
ご飯の支度ができていた。
「亜夢、紹介するわ。長田和宏さん」

お母さんが言った。
「長田です。よろしくお願いします」
男の人は、大人に話すように丁寧に言った。
「新しいお父さんよ」
お母さんが言った。
「えっ、それじゃお父さんは」
「古いお父さんだ」
おじいちゃんが言った。
「こんなときに、つまらない冗談を言って」
おばあちゃんが、おじいちゃんをにらんだ。
「結婚するの」
「結婚……」
「そう。亜夢、わたしたちと一緒に住もうね。和宏さんもいいって。お父さんとも話し合ったの。お父さんとお母さんはもう会わない。わかって、亜夢」
「よいパパになるように努力するよ」
男の人は言った。
「わたし、ここにいる。いいよねえ、おじいちゃん」
おじいちゃんは、黙って亜夢の頭をなでた。亜夢は、「わあ」と、泣きながら、二階へ上がった。亜夢は、お母さんが結婚するのが悲しくて、泣いたのではなかった。一月に一回、お父さんとお母さんと亜夢の大切な時間が、なくなるのが悲しかった。

十一　見えない訪問者

お母さんが、ふすまをそっと開けた。亜夢は寝たふりをした。しばらくすると、玄関で大人たちの話し声が聞こえた。また、しばらくすると、おばあちゃんが、ふすまをそっと開けた。亜夢は寝たふりをした。おばあちゃんは、しばらく枕もとでじっとしていた。そして、お布団をなおした。おばあちゃんが出ていった後、枕もとに、亜夢のお弁当があった。亜夢の好きな卵焼、ウィンナー、小さなおにぎり。

亜夢は「いただきます」といつものように言って、お弁当を食べた。その後、歯をみがいた。亜夢は決められたことは、きっちりとする子だった。その後、おならを一つした。お母さんのおならもたくさん聞いた。お母さんはいつもこう言った。

「ごめんあそばせ」

後は二人で笑う。

「どうする？」

おじいちゃんが言った。

「ここがいやだと言うまで、亜夢を育てましょう」

「長生きしなきゃなあ」

戸をたたく音がした。

「誰だろう」

おじいちゃんが言った。

おばあちゃんが戸を開けた。誰もいなかった。一筋の風が、居間を吹きぬけていった。

あなたは夢をどう思っているのでしょうか？　ほとんど色のない、音も、においもない。不思議な世界です。夢は見るものではなく、感じるものですね。心の世界です。それでは、わたしたちは、亜夢の夢に入っていこうと思います。

亜夢は森の道にいた。道は薄暗かった。夕方なのだろうか。明け方なのだろうか。

「亜夢ちゃん」

道に風太が立っていた。

「ここは夢の世界だよ」

「夢？」

「さあ、行こう」

風太が、亜夢の手を取って歩き出した。歩くという感じではなくて、向こうから影絵がやってくる感じだった。

小さな森があった。

「夢の森だよ」
風太が言った。
「夢の森には、夢の道からしか行けないんだ」
道が次々やってくる。おじいちゃんやおばあちゃんとすれ違う。クラスの子もいる。スーパーのおばさんもいる。ふり返っても誰もいない。ただすれ違うだけ。
いつの間にか亜夢は、小さな家の前に立っていた。風太はどこへ行ったのだろう。姿が消えていた。もともと風太に形があったのだろうか。
家の中から人の声がした。大声や笑い声やひそひそ声もした。でも、なにを言っているのか亜夢には分からなかった。
亜夢はドアのノブを押した。中は意外にひろくて、たくさんの人が食事をしたり、話をしたり、笑ったりしていた。道と同じでレストランの中も薄暗かった。料理を運ぶ人も食べている人も形がなかった。みんな形がなかった。でも、そこに大勢の人がいるのが分かった。
「亜夢、こっちだよ」
窓際のテーブルで、亜夢を呼ぶ人がいる。お父さんだと分かった。お母さんもいる。お父さんとお母さんも形がなかった。
ここは何度か行ったことのあるレストランだ。レストランも形がなかった。亜夢は形のないものに囲まれていた。出てくる料理には味も形もなかった。でも、とてもおいしいと亜夢は思った。最後にフレンチトーストではなくてデザートがでた。イチゴと生クリームの甘いデザート。甘いはずだと亜夢は思った。
「なあんだ、なにも変わっていない。お父さんもお母さんもわたしもレストランも。なにも変わっていない」
亜夢は、まわりの音が消えているのに気づいた。亜夢のテーブルだけで、まわりの人はみんないなく

なっていた。
「みんな帰ったのかしら」
お父さんもお母さんもいなくなっていた。亜夢だけが、ぽつんとテーブルの前に腰かけていた。

十二　夢売り

風太がドアを開けて入ってきた。
「お父さんとお母さんに会えた？」
と風太が言った。亜夢はうなずいた。
二人は外へ出た。家の中も、道も、薄暗い。夢の世界は薄暗い。風太が亜夢の手をとった。亜夢は風太の手をふりはらった。
「大丈夫」
亜夢は言った。
「夢の子供の中には悪い子もいるんだ。悪いっていっても……」
風太は言葉をつまらせた。亜夢には分かる。これは亜夢の夢だもの。亜夢は風太の手を取った。
「亜夢ちゃん。君は間違っているよ。亜夢ちゃんは、自分の夢の中にいると思っている」
「そうでしょう」
「違うよ。夢神が作った森にいるんだよ」
「夢神？」
「夢の神様。人が夢を見るのは、夢の森に来ることなんだ。この森は、何十億の人の夢であふれている」
「怖い。帰りたい」
「大丈夫。夢神は怖くない。夢神に会いに行こう」
細い道を歩いた。道で白い小さなあぶくに出会う。空中に浮いていた。
「夢売りだよ」
風太が言った。
「夢を売っているんだ」
「誰が買うの」

亜夢が聞いた。
「知らない」
風太は不機嫌な様子で言った。
「どうしてそんなことを聞くの？　夢売りは夢を売る。それでいいんだ」
「楽しい夢を買いませんか」
「美しい夢はいかがですか」
「若い時の夢を買いませんか」
夢売りたちは、大きな声をあげて、亜夢のそばをすれ違っていった。
「どうしたら買えるの？」
「君はもう買ってしまったよ」
と風太は言った。
あのレストランだと亜夢は思った。
黒いあぶくも空中に浮いていた。
「悪い夢だ。さわらない方がいい」
亜夢は、黒いあぶくをさけるようにして歩いた。でも時々あたった。
「大丈夫。ぼくと手をつないでいれば大丈夫だよ」
「じゃあ、どうしてさけなければならないの？」
風太は答えずに、ふーんと鼻を鳴らした。そして、
「どうして、どうして、ばっかりだ。ここは夢の世界だよ」
と言った。

十三　夢神

道はひろい場所に出た。その向こうにすごく高い塔が見えた。上半分は雲の上にあった。塔にはいくつもの銀色のリングがまわっていた。
「きれい」
亜夢は思わず叫んだ。
「行こう」
風太が言った。いつの間にか、風太の背中に、翼

が生えていた。
「亜夢ちゃんも飛べるよ」
後ろを見ると、亜夢にも翼が生えていた。
「飛ぼう」
風太は翼を動かした。
「背中に力を入れるんだ」
言われた通りにすると、亜夢の体は、ふっと空中に浮いた。風太と手を取り合って塔に向かって飛んだ。
「すごい」
亜夢は言った。
「わたし、飛んでる！」
二人は雲をつきぬけ。塔のてっぺんに舞い降りた。屋上は小さい庭で、白い花が一面に咲いていた。空中で光っているものがある。目をこらすと、小さな雫だった。
もっと目をこらすと、夢神は雫の中にいた。白い服を着た女の人だった。後藤先生に似ている。
「こんにちは、亜夢」
夢神は言った。
「こんにちは夢神さん」
亜夢が言った。
「亜夢。亜夢が生きているのは、とても不思議なことなの。まずお父さんとお母さんがいなければ亜夢はいない。お父さんのお父さんやお母さんが、いなければお父さんはいない。お母さんだってそうよ。おじいちゃんとおばあちゃんがいなかったら、お母さんはいない。だから、誰でも、生まれたことに感謝しなければいけないの。少しむつかしいかもしれないけど」
夢神は言った。すると、雫がはじけた。同時に夢神は消えた。
「夢神はやさしい神様ね」
亜夢が言った。
「でも、夢神は夢を食べる。それが恐ろしいことに

もなるんだ」
風太が言った。
戸をたたく音がした。
「誰か来たのかなあ」
おじいちゃんが戸を開けると、おばあちゃんの横をすっと風が通りぬけていった。一瞬、それは子供の姿のように見えた。
亜夢が目を覚ますと、夢のほとんどが夢の世界に帰っていった。夢のレストランだけが少し残った。

十四　もどり橋

町に流れている「もどり川」の川幅はせまいけれど、下流に行くにしたがって、川幅は広くなり、川が下から上に流れているように見えるところがある。ちょっと有名で、川を見下ろす展望台は、桜の名所にもなっている。亜夢は、今年の春におじいちゃんとおばあちゃんにつれて行ってもらった。
「ほら、ほら、さかさまに川が流れているだろう」
おばあちゃんが指をさしたけれど、亜夢にはよく分からなかった。
町の真ん中に、古い木の橋がもどり川にかかっている。もどり橋だ。狭くて車はとおれない。
「もどり橋に幽霊が出るそうですよ」
晩ご飯のときに、おばあちゃんが言った。
「もどり橋って？」
亜夢が聞いた。
「学校から、もう少し行ったところだよ。もどり橋は、何回渡っても、向こう岸に着かないという言い伝えがあるんだ」
おじいちゃんはそう言って、煙草に火をつけようとした。おばあちゃんは「ダメ」と、小さいけれど、

きつく言った。おじいちゃんは苦笑いして、「よいしょ」と、立ちあがった。
「亜夢は学校より先は行かないからね。行かない方がいいよ。川はあぶないから」
おばあちゃんが言った。
「幽霊って？」
亜夢は聞いた。
「幽霊？　怖い夢を見たらいけないからね。また今度ね」
おばあちゃんは言った。

次の日、良太と七海ちゃんと学校へ行く途中、
「幽霊っているの？」
と亜夢は二人に聞いた。
「そんなのいないよ。お母さんが言ってたもん」
七海ちゃんが答えた。
「いるかもしれない」
良太が言った。
「お客さんが話していたって」
良太のお母さんは、保険会社で働いている。酒屋さんを訪問したときのことだ。
「うちの亭主が、幽霊を見たって」
「幽霊？」
お母さんは聞いた。
「もどり橋の近くでね。配達に行った帰りにね」
酒屋の奥さんが言った。
「白い着物を着た人が橋のそばに立っていて、おじさんが、『こんにちは』って、あいさつすると、ふっと消えたんだって」
良太が言った。
「見間違いよ、絶対」
七海ちゃんが先生みたいに言った。

その日の帰り道で、
「ちょっとだけ、もどり橋を見に行こうよ」

良太が言った。
「いや」
亜夢が首をふった。
「ちょっとだけだよ」
良太は言った。
「いや、こわいもん」
七海ちゃんも首をふった。
「おばあちゃんが行ってはいけないって」
亜夢は言ったが、気持ちは反対だった。まだ明るいし、おばあちゃんも話してくれなかったし、ちょっとぐらいと思った。七海ちゃんも一人で帰るのがいやだった。
「少しなら」
亜夢が言った。
七海ちゃんもしぶしぶうなずいた。
人通りも多いし、生徒もたくさんいる。おだやかな昼下がりだった。
「なあんだ、これじゃ、冒険にならないなあ」
良太がガッカリして言った。
「みんな普通だもん。やっぱり夜中に来なくちゃあ、幽霊はあらわれないよ」
良太が言った。
もどり橋も人通りが多い。みんな平気で渡っている。
「帰ろうよ」
七海ちゃんが言った。そのとき、ふっと薄暗くなり、まわりの人々が消えた。
「みんな消えたよ。こわい」
七海ちゃんは泣き声で言った。
「大丈夫」
良太は男らしく言った。でも、声は震えていた。
「だれかいる」
亜夢が言った。
「橋を渡ろうとしている」
良太が言った。女の人はまばゆいばかりに輝いて

いた。
「あれ、また渡ろうとしている」
亜夢が言った。七海ちゃんもこわごわ目を開けた。不思議な光景だった。女の人だけが光っていて、まわりは薄暗いのだ。女の人は、亜夢たちに気づいた。
「森に来た子だね」
美しい人だった。
「わたしはアマテラス。光神なの。この橋を渡って、森に帰りたいのに。なんど渡っても、もどってきてしまう」
アマテラスは悲しそうに言った。
「いっしょに渡って」
アマテラスが亜夢の手を取った。とてもあったかい手だった。お母さんの手みたいだと亜夢は思った。七海ちゃんも手をつないだ。亜夢は良太と手をつないだ。
「わあ、光っている」
亜夢は思わず叫んだ。亜夢も七海ちゃんも良太も、アマテラスと同じように光り輝いている。四人は橋を進んでいった。太鼓や笛が聞こえてくる。それにまじって歌も聞こえてきた。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない

橋はとても長かった。やっと向こう岸に着いたと思ったら、四人は元の橋のたもとに立っていた。アマテラスの光が薄くなっていく。それにつれて川の音が聞こえ始め、まわりのざわめきがもどり、アマテラスは消えた。
三人は帰り道で、誰にも言わないと約束した。言っても誰も信じないし、三人だけの秘密がいいと思った。アマテラスの手はお母さんみたいだった。そ

れを思うと涙が出た。
「どうしたの」
七海ちゃんが聞いた。
―アマテラスの手はお母さんみたいだった―
亜夢は泣きじゃくりながら思った。七海ちゃんは亜夢が泣き出したのを、違う意味にとったようだ。
「あの女の人、かわいそう」
と言って、七海ちゃんも泣き出した。
良太が汚いハンカチを亜夢に渡した。
「泣くなよ」
良太はそう言ったが、良太もなんだか悲しくなって泣きたくなった。

タマが昼寝をしている。森の中を歩いている。亜夢ちゃん、良太君、七海ちゃんも一緒だ。カラスのカーもいる。でも、森は暗い。真っ暗だ。なんて暗い森だろう。カーの羽根みたいだ。

十五　光の子供たち

今日は月に二回ある、外で給食を食べる日だ。給食のおばさんが、サンドイッチやおにぎりなどを作ってくれる。今日はおにぎりだ。亜夢、七海ちゃん、良太の他にも、山田さん、鈴木君、樹里ちゃんもいる。亜夢といっしょに食べたらおいしい。それは亜夢がよく笑う子だから。
今日は後藤先生も仲間入りだ。
フェンスの上で光っているものがある。
「あれ、何だろう」
七海ちゃんが言った。
「なあに？」
後藤先生が言った。
「フェンスの上で光っている」
七海ちゃんが言った。
「何だろう」

亜夢も良太も言った。
「先生には見えないわ」
「見えないよ」
鈴木君も言った。
後藤先生を呼ぶ声がした。先生は急いで立ち上がった。
「なにも見えない」
山田さんが言った。鈴木君もうなずいた。のんびりやさんの樹里ちゃんは、ぽかーんとしていた。
「砂場で遊ぼ」
鈴木君が言った。
「うん」
と山田さんが言った。樹里ちゃんは二人についていった。
「もう少し近づこう」
良太が言った。
フェンスの上で、光のボールが三つ浮かんでいた。
「光の子供」
「光の子供」
「光の子供」
ボールは同じ言葉を喋った。真ん中の子供は女の子だ。あと二つは区別がつかない。でも、二つだから、AとBにしよう。
「森に行った子供にしか見えないんだよ。声も聞こえない」
Aが言った。
「大人はみんな見えないけれど」
Bが言った。声は少しちがうみたいだ。
「だって森に行かないもん」
女の子が言った。
「わたしたちも森へ行ったことがない」
亜夢は言った。
「来たよ。木馬に乗ったじゃない」
Aが言った。
「楽しかったなあ」

Bが言った。
「馬神が木馬を速くまわしてくれた」
女の子が言った。
「君たちの名前は？」
七海ちゃんが聞いた。
「名前なんてないよ。みんなみんな光の子供だよ。アマテラスをさがしに来たんだ」
Aが言った。
「光の森は真っ暗になってしまった」
Bが言った。
「アマテラスがいなくなったから」
女の子が言った。
「昨日もどり橋で会ったよ。きっと、あの女の人だ」
良太が言った。
「もどり橋につれて行って」
三人が声をそろえた。
「でも、学校が終わるまで待ってよ」
と良太は言った。そんなに簡単に約束していいのかなあと亜夢は思った。
―家に帰っても誰もいない―
良太は心の中で思った。
「わたしも行く」
亜夢が言った。
「わたしも」
七海ちゃんが言った。
そのとき、昼休みの終わりを知らせるチャイムが鳴った。
校門を出ると、光の子供たちが待っていた。七海ちゃんの肩には女の子がのった。亜夢の肩にはB、と思う。だから、良太の頭の上にはAだ。
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋

どこまで行っても渡れない
七海ちゃんが歌った。七海ちゃんは歌がとても上手だ。
「その歌って？」
Aが言った。大きな声だ。
「もどり橋で聞こえてきたの」
七海ちゃんが言った。
「女の人が橋を渡れないんだ」
良太が言った。
「もどってしまうの」
亜夢が言った。
「きっとその橋が帰る道なんだ」
亜夢の肩でBが言った。
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
三人と三つは歌い出した。
もどり橋に着くと、待っていたかのようにあたりが暗くなった。
「来てくれたのね」
「あなたがいなくなってから、光の森は真っ暗です」
女の子が言った。
「ここへ来る道は誰に聞いたのですか？」
Aが言った。
「影の国のアリスよ。光のお風呂に入っていたら、アリスがきたの。子供の影だった」
「楽しいぞ、楽しいぞ。森の外は楽しいぞ」
影は踊った。
「早く行かなきゃ、道がとじてしまうよ。とじてしまえば千年、開かないよ」
「森の外に何があるの？」
「いっぱいあるさ。面白いぞ。面白いぞ」
アマテラスは、お風呂から立ち上がった。

「どっち」
「あっち、あっち」
影が指さした。その向こうに橋が見えた。
「一度だけ行かせてあげる。でも一度だけだよ。それも、七日間だけ。七日過ぎたら帰り道は閉じてしまうんだ。次は千年開かないもん」
アマテラスは、裸のまんまかけだした。
「いそげ、いそげ。面白いぞ、面白いぞ」
後ろで影は大笑いした。
「影の国のアリスって子供でしょ？」
アマテラスが言った。
「違うよ。アマテラスとそっくりな人。教科書に書いてあったよ」
Aが言った。
「わたしとそっくり……。教科書ねぇ。わたしは勉強が嫌いだからなあ。でも」
アマテラスがクスッと笑った。
「裸だと恥ずかしいから、雪ん子の服を借りてきたの。似合ってないかなあ」
「似合っているよ」
亜夢は言った。白い服はふんわりしていて、すてきだ。
「ぼくらは雪ん子に聞いたんだ。アマテラスが橋を渡っていったって」
Aが言った。
「雪ん子は、裸ん坊で泣いていたよ」
女の子が言った。
「そうね。服を返さなくちゃ。もう十分遊んだし。六日もたったし」
「大変だ！　あと一日だ」
光の子供たちは叫んだ。
アマテラスは亜夢の肩に手を置いた。
「亜夢、影の国に行ってアリスに会ってほしいの。もどり橋を渡る方法を聞いてほしい」
「お願い亜夢ちゃん、良太君、七海ちゃん」

光の子供たちが声をあわせた。
「光の森がなくなってしまう」
光の子供たちもアマテラスと同じで、もどり橋からしか森に戻れない。
三人は森に入った。猫のタマとカラスのカーも来ていた。
森の門番に出会った。
「どこへ行くのかね」
「影の国」
亜夢は言った。
「今日はトマトを持っていないな」
「あっ、そうだった」
七海ちゃんが言った。
「通すわけにはいかない」
キツネの門番は手を広げた。亜夢たちはトマトを取りに森を出た。でも、森を出れば森の出来事を忘れてしまう。
「どうしたの？」
光の子供たちが聞いた。亜夢たちはなんども森に入り、門番に追い返され、また、森から出てきた。八度目だった。何度も来るので、門番は堪忍袋の緒が切れた。
「次に手ぶらできたら、最初にカラスを食うぞ。次に手ぶらできたら、猫を食うぞ。次に手ぶらできたら、女の子から食ってやる」
門番の口が耳までさけた。そのときどこからか声が聞こえた。
「その子らは、ぼくの友達だよ」
「風太か。でも、何にもなしじゃ、やっぱり通せない」
一瞬、強い風が吹いた。門番の足もとに、亜夢が見たこともない果物がいくつも落ちてきた。すごくいい香りがする。門番は舌なめずりをした。そして、むしゃむしゃと食べ始めた。

「うまい。森の果物の中で梨が一番うまい」
「それって梨？」
七海ちゃんが言った。太っちょのバナナみたいだ。
「ほれ、お前らも食べてみろ」
皮はバナナのようにむけた。
「梨の味だ」
無口なタマが言った。
「うまいぞ、うまいぞ」
カラスのカーが、羽根をばたつかせながら言った。
「おいしいね」
三人は言った。
「でも、おじいちゃんのトマトの方がおいしいよ」
亜夢は門番に聞こえないように、小さな声で言った。

十六　影の国のアリス

門番はおなかがふくれると、横になって眠り始めた。
「さあ行こう」
いつの間にか風太が現れた。
「影の国に行きたいの」
亜夢は言った。
「影の国は危険だよ。ぼくも森の奥までは行けないよ」
風太が言った。
「でも、アマテラスが帰らないと、光の森は真っ暗なままなの」
七海ちゃんが言った。
「光の森は真っ暗だって、誰かが言っていたなあ」
風太が言った。
「アリスに会わなければ」
良太が言った。
「アリスに会って、もどり橋を渡る方法を聞くの」
亜夢は言った。

「分かった。でも、アリスは変わり者だよ」
その時、音楽が聞こえてきた。
「影の国へ行くには、音の森を通るんだ」
風太が言った。
楽団が演奏をしていた。子供もおじいちゃんもいる。みんな楽しそうに演奏をしていた。見たこともない楽器もある。カタツムリの形をしていた。それをおじいちゃんと子供が吹いている。
「あの楽器は、音の妖精を呼ぶんだ」
風太が言った。
子供が吹くとシャボン玉が出てくる。シャボン玉の中に音の妖精がいる。妖精たちは美しい音をかなでる。

明日は明日
昨日は昨日
今が好き
すぐに消えてしまうけれど
今が好き
あぶくのような今が好き

もう一つの不思議な楽器をおじいちゃんが吹くと、シャボン玉が出てくる。

今って、なあに？
今って、なあに？
あっという間に過ぎ去っていく
今って、なあに？
子供の楽器が答える。
今って今よ
そうしか言いようがない
今って今よ
七海ちゃんが歌う。
明日は明日
昨日は昨日
今が好き
すぐに消えてしまうけれど

今が好き
あぶくのような今が好き
七海ちゃんは歌が上手だ。でも、ちょっと自慢しすぎと亜夢は思った。でも、きれいな声だなあ。亜夢も七海ちゃんみたいに歌えたらなあ。
「演奏会があるんだ。きっと招待状が届くよ」
風太が言った。
「行きたい！」
三人と一匹と一羽は同時に言った。
「招待状は一枚だけだよ」
風太が言った。
音の森を通りすぎた。演奏は聞こえなくなった。
―夢と同じ道だ―
タマは思った。

闇がだんだん濃くなる。少し気温も下がった。
「ここからは影の国だ」
風太が言った。
「（影買い）には気をつけて」
夢の森には夢売りがいた。ここには（影買い）がいる。
「話しかけられても、喋ってはいけないよ」
「無視するの？」
七海ちゃんが聞いた。
「無視すると（影買い）は怒るから」
「それじゃどうすればいいんだ」
カーが言った。
「首をふる。うなずいたらダメだよ」
最初の（影買い）は、七海ちゃんの影から立ち上がった。
「かわいいお嬢ちゃん。あなたの影を売ってくれないか。もっとかわいい影をあげるから」
七海ちゃんは、一生懸命首をふった。
「ダメか」
（影買い）は消えていった。

亜夢の影から、次の（影買い）が立ち上がった。
「お前のかわいい影を売らないか」
亜夢は、一生懸命首をふった。（影買い）は光るものを、亜夢の顔に近づけた。美しい青い玉だった。
「影をくれたらこれをやるよ」
亜夢は、また一生懸命首をふった。
「ちえっ、ダメか」
「男の子の影はねうちがある」
良太の影から立ち上がった（影買い）が言った。
「強くて濃くってさあ」
影は舌なめずりをした。
「おいしいんだろう」
風太が言った。
「風の子か。お前はもともと影なんかないくせに。口出しするな！」
良太も首をふった。
（影買い）がタマの影から立ち上がった。
「かわいい猫だ。影を売らないか。虎の影と交換しよう」
タマは首をふった。カラスのカーの影からは（影買い）が立ち上がらない。
「何だよ、ぼくの影はいらないの」
「カラスの影なんかいらないよ。お前が影みたいだ」
（影買い）は大笑いした。
「だけど口をきいたからいただいておく」
カーの影がカーの体から飛び出した。
ますます道は暗くなっていった。もう影もうつらない。
「もう、（影買い）は出ないよ。闇の奥にアリスがいるよ」
風太が言った。
やがて、お互いの顔が見えないくらいに暗くなった。
「アリスがいる。ぼくはここから先は行けない」

風太はくるりと背を向けた。泣いているのだろうか、背中が小さくゆれていた。
「ありがとう」
亜夢は、風太の背中に言った。
アリスは、ぼんやりと光っている。でも冷たい光だ。アリスはアマテラスとそっくりだった。
「人間がここまで来るなんて」
アリスは、にこりと笑った。ヒューと冷たい風が吹いた。
「闇は自由よ。見えないものも見える。見えるものしか見えない世界なんてつまんない」
アリスはつまらなさそうにため息をついた。美しい人だ。ため息まで美しい。
「アリスさん、アマテラスさんが、もどり橋を渡れないので困っています」
七海ちゃんが言った。
「森の外に出たいって言うから教えてあげたのよ。でも行く道と帰る道は違うの。帰る道は聞かれてないもん」
「光の森が真っ暗になった」
良太が言った。
「そんなのわたしに関係ない」
アリスは言った。アリスの姿が消えて、大きな氷の輪が空中に浮かんだ。氷の輪はきらきら光っていた。その中にアリスがうずくまっている。アリスはゆっくりと立ち上がった。アリスの体はきらきら光る氷になっていた。
「それよりもっと前に。氷の輪の中へ来たら教えてあげるかも。かもはかも鍋。笑わない。わたしのギャグが通じない！」
「本当に教えてくれるの」
亜夢が言った。
「かもよ」
「どうしよう」
七海ちゃんがみんなの顔を見た。

「行こう」
良太が言った。
「行こう」
カーも言った。
「行かなきゃ何にも始まらないわ」
無口な猫が言った。
亜夢たちは氷の輪に向かって歩いた。そのとき、亜夢らを吹き飛ばす強い風が吹いた。
「風神！」
アリスは叫んだ。
「風太だけじゃ心配だから来たんだ。その輪の中に入ると奈落に落ちる」
「奈落って」
良太が言った。
「地獄だよ」
風神が言った。
「お久しぶりね、風神。ますます不細工になって」
アリスは軽やかに笑った。美しい、でも冷たい。
「アマテラスがいなくなって、光の森は困っている。お前はアマテラスの影ではないか。アリス、お前は間違っている」
「お前だなんて。あんたに言われたくない」
アリスは言った。
「本体と影は別々の森に住んでいる。でも、無関係じゃない。あちらが成長すればこちらも成長する。あちらが死ぬとこちらも死ぬ。アマテラスが死ぬとお前も死ぬ」
「またお前って言った！」
アリスが氷の矢を放った。風神はすばやくかわした。
「アマテラスは死なない。ただ森に帰れないだけ。この森にもう一人のわたしはいらないの」
風神は風袋をかまえた。
「お前を吹き飛ばしてやる」
「野蛮だなあ。最後はおどし。でも、吹き飛ばされ

るのもいやだから。森に帰る方法を教えてあげる。もどり川に飛びこむのよ。それがたった一つの森に帰る方法」
「分かった。この子らはわしが送っていく」
「でも、森を出れば、森の出来事を忘れてしまう」
亜夢が言った。
「かしこい子だ」
風神が亜夢の頭をなでた。
「風太が夢の道を通って、亜夢ちゃんの家に行くよ。夢を忘れなかったら、大丈夫だ」
亜夢らは、風に飛ばされた。

また森の入り口に立っていた。
「やっぱりダメだったんだ」
光の子供は言った。
「ごめん」
良太が言った。光の子供たちは首をふった。
「ありがとう」
「明日になれば何かが変わるかもしれないね」
女の子が言った。
「いいえ、もう変わっているのかもしれない」
亜夢が言った。カーの影はなくなっていた。でも、そんなことは誰も知らない。カーも知らない。カーの影が影の国を飛びまわっているのも。

十七　この夢を忘れてはダメ

今日は不思議な一日だった。
晩ご飯のとき、亜夢はおじいちゃんに聞いた。
「アマテラスってどんな人」
「神様だよ」
「神様って？」
「うーん」
と、おじいちゃんはうなった。
「人間を超えたもの」

「人間じゃないの？」
「そう、人間じゃない」
おじいちゃんは言った。
「亜夢は神社に行ったら、手を合わせるだろう。なにに向かって手を合わせているの」
おばあちゃんが言った。
「なにによって……。そうしなさいって言われたから」
おじいちゃんは大笑いをした。おばあちゃんは亜夢の頭をなでた。
「アマテラスは、古事記や日本書紀に登場する神様だよ。亜夢も大きくなったら読んでごらん。アマテラスは太陽神なんだ」
おじいちゃんが言った。
「光の神様だね」
「そう言ってもいいよ」
「アマテラスがいなくなると、真っ暗になるの？」
「そうだね。アマテラスが天岩戸という岩でできた洞窟に隠れてしまって、一日中夜になった話があるよ」
亜夢には、おじいちゃんの話が面白かった。
「アマテラスはいるんだ」
と思った。
「わたし、アマテラスに会ったよ」
と、言いかけて、七海ちゃんや良太との約束を思い出した。
おばあちゃんとお風呂に入りながら、
「神様っているよね」
と聞いた。
「いるとも」
おばあちゃんは、亜夢の小さな背中を流しながら言った。
「かわいそうに、両親と離れて、この子は淋しいのに一生懸命生きている」
おばあちゃんの目から涙が落ちた。

亜夢が二階の部屋に上がると、玄関の戸が開いた。
「やれ、やれ、この家も古いからなあ」
と、おじいちゃんはお酒に酔って、足をふらつかせながら、玄関の戸を閉めに行った。そのとき、また、風が吹いた。小さな子供が駆けぬけていった。
「どこの子だ？　今、子供が入ってきた」
「誰もいませんよ」
おばあちゃんは笑いながら言った。
「酔ってしまったかなあ」
おじいちゃんは頭をかきながら、苦笑いをした。
亜夢は前にも同じ夢を見た気がした。
亜夢は森の道にいた。道は薄暗かった。夕方なのだろうか。明け方なのだろうか。
「亜夢ちゃん」
道に風太が立っていた。
「ここは夢の国だよ」
「夢の国？」
「アマテラスに伝えて」
「なにを？」
「もどり橋を渡る方法は川に飛びこむんだ」
「そう言えばいいの？」
「橋があるから渡ろうとする。この夢を忘れてはダメ。言ってみて」
「もどり橋を渡る方法は川に飛びこむ」
「もう一度」
「もどり橋を渡る方法は川に飛びこむ」
亜夢は目を覚ました。急いで今見た夢を書いた。
「もどりはしをわたるほうほうは、かわにとびこむ」
また、玄関の戸が少し開いた。小さな影が出ていった。
「年のせいだね。ずいぶん目が悪くなった」
おばあちゃんは目をこすりながら、玄関の戸をしめた。

十八　虹の橋

「昨日、夢を見たの」
学校からの帰り道に亜夢は言った。
「どんな夢？」
七海ちゃんが聞いた。
「もどり橋を渡る方法」
亜夢は言った。
「アマテラスが森に帰る方法だね」
良太が言った。
「川に飛びこむの。橋があるから渡ろうとする」
亜夢は言った。
「アマテラスに教えてあげなきゃ」
七海ちゃんは言った。
「それじゃ、三人で、もどり橋に行こう」
良太が言った。良太は頼りになる男の子になったと亜夢は思った。ちょっと前は、すぐに泣いたし、先生に指されても答えられない頼りない子だったのに。男の子って強いんだ。森に行くことで強くなったんだ。七海ちゃんもそうだ。でも、わたしはどうだろう。めそめそして、お母さんのことをいつも思っている。弱い子だ。
「大丈夫、亜夢は強い子だよ」
亜夢の思っていることが分かったのだろうか、七海ちゃんは言った。
「いつも一緒だよ」
良太が言った。
「昨日見た夢を忘れずにがんばったんだから」
七海ちゃんが言った。
「アマテラスを光の森に帰らせてあげようよ」
良太が言った。
もどり橋の付近はいつものように人通りが多い。三人は辛抱強く待った。時々すれ違う友達が「どうしたの？」と、声をかける。「暗くなると幽霊が出

るぞ」と、おどかす男の子もいる。
少しずつ暗くなってきた。人通りもなくなり、まわりに誰もいなくなった。白い服が見え、輝くアマテラスが現れた。光の子供もアマテラスの肩にとまっている。
「もどり橋を渡る方法を教えて下さい」
アマテラスが言った。
「川に飛びこむの」
亜夢が言った。
「渡ろうとするから渡れない」
良太が言った。
「分かった」
そう言うなり、アマテラスは川に飛びこんだ。アマテラスは川に流される。
「アマテラスは泳げない！」
光の子供が叫んだ。
「泳げないの」
亜夢も叫んだ。
「ばーか、だまされた」
どこからそんな声が聞こえた。アマテラスはドンドン流されていく。そのとき、稲光が空を切りさいた。はげしく雷が鳴った。
「こわい」
七海ちゃんが泣き出した。激しい雨に三人は、ずぶぬれになった。
「あっ」
良太が空を指さした。
「雷神だ」
光の子供が叫んだ。
雷神がバチで太鼓をたたいた。ドンドドン、ドンドドン、ドンドドン、どんどととどんどととと。もどり橋の歌だ。
「お前たちも歌え」
耳をつんざくような大きな声が空から落ちてきた。
もどり橋、もどり橋、もどり橋

どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
三人と光の子供たちは、太鼓に合わせて大声で歌った。
「川が」
亜夢が指さした。
「反対に流れている！」
良太が叫んだ。遠くにアマテラスの姿が見えた。
「そうら、もう一息だ」
雷神が言った。
ドンドドン、ドンドドン、ドンドドン、どんどととどんどととと。
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
アマテラスが橋の近くまで流されてきたとき、空中に虹がかかった。いつの間にか雨はやんでいた。雷神が一つ大きく太鼓をたたくと、川の水はせり上がり、アマテラスは虹の橋に立っていた。
「さようなら」
アマテラスは手をふった。光の子供たちも手をふっている。亜夢らも手をふった。アマテラスたちは虹の橋を渡り始めた。
アマテラスはふり向いた。
「また会えるといいね」
アマテラスは言った。
「また会えるといいね」
光の子供たちは一緒に言った。
そう言って、虹の橋の向こう側に消えていった。
いつの間にか、まわりが騒がしくなり、いつもの景色に変わった。服もぬれていない。
「また会えるといいね」
三人は手をつなぎ、スキップしながら、もどり橋

を渡った。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
どこまで行っても渡れない

十九　眠り姫

森の奥まったところに、小さな眠りの森があります。住んでいるのは、眠り姫と姫のお世話をする女狐が二匹。狐は人の姿をしています。一匹はあさぎ。もう一匹はヨモギ。あさぎは茶色のキツネ。ヨモギは白いキツネです。あさぎとヨモギは姉妹です。猟師に撃たれた母ギツネが、必死に巣までたどり着き息絶えたのです。通りがかった殿様が、巣穴で泣いている二匹の子狐をかわいそうに思い、家に連れて帰ったのです。この恩は計り知れないほどです。

眠り姫は輝くような美しさです。今にも、起き上がってきそうです。狐が一日に二度石清水（谷川の源流からいくつもの岩を通ってしみ出してくる水です）でお口をしめらせます。石清水にはすべての栄養素が含まれているのでしょう。それだけで何年も生きておられるのです。

姫が眠りに落ちたのは、眠りの森の奥深くに咲く、眠り草の花のかおりをかいだからです。それから十年も眠り続けておられます。乳房が少しふっくらとなりました。

眠り姫のお世話は、むつかしいものではありません。ほとんど食事をされないので、おしっこを少しされるだけです。

わたしですか？　あさぎと申します。姫の父上は、眠りの森をおさめる殿様でした。母上も美しい人でした。お二人はわたしたちキツネのようなものにも、やさしい言葉をかけてくださいます。しかし、母上は姫が眠りについたのを悲しみ、千日の嘆きのすえ

亡くなりました。殿様は悲しみにたえておられたのですが、有名な予言者―それは赤い梟でした―が、やってきて「姫は死ぬまで目覚めない」と予言したとき、矢が折れるように亡くなりました。それからは、あさぎとヨモギが姫に仕えています。

夢神が時々、遊びに来ます。夢神はとてもわがままです。一日に何回も来たり、何か月も来なかったりするのです。姫の夢の中でどんな話をしているのでしょう。眠り姫の話す相手は夢神だけです。夢神が来たとき、時々笑われるのです。

眠り姫を目覚めさせる「目覚めの草」があると聞きました。目覚めの草を求めて、いくつもの森を旅したのですが、そんな草はありませんでした。でも、夜中の森でわたしは聞いたのです。夜中の森は一日中ずっと夜なのです。だから、眠りについて知っている人が多いのです。

「目覚めの草は森の外にある」

夜中の森で聞いたのですから、誰が言ったのか分かりません。でも、わたしには聞こえたのです。

森以外に世界がある。わたしたちは森で生まれて、森で死んでいくのです。まだ見ぬ世界があるとは……。

あるとき、わたしは、ついうとうとと眠ってしまったのです。夢神が来たと思いました。小さな雫が空中に浮かぶのです。雫がはじけると、夢神が姫の夢に入ったのです。偶然わたしも姫の夢に入りました。

そこは、光り輝く世界でした。色彩も豊でした。わたしたちキツネは、赤い色と数種類の色しか見えないのに、姫の夢の中では無数の色が見えるのです。音楽も聞こえました。今まで聞いたこともない美しい音色でした。次にお花畑が現れました。白い花ばかりです。姫がいました。花を摘んでいるのです。笑顔がいっぱいです。姫の横に夢神がいます。姫に語りかけています。花の色が白から黄色に次々に変

わっていきます。
姫はこんなすばらしい世界に生きておられる。不幸だとか、かわいそうだとか思うのは間違っていたと思いました。
「誰だ！」
夢神がわたしをにらみました。とたんに口が耳までさけて、恐ろしい顔になりました。「夢の中に入るのはわたしだけ。お前は誰だ！」
わたしは夢から覚めました。夢神の恐ろしい顔が目に焼きついていました。はやく目覚めていただかなければ、姫が夢神に食べられてしまうと思ったのです。
ヨモギに姫のことをたのみ、わたしは旅に出ました。
わたしはキツネの姿になり、道を急ぎます。四本足の方が走りやすいのです。
わたしはまず長老の森に行ってみることにしました。西の方角にあるというだけがたよりです。もちろん行ったことはありません。長老なら知識も多いのではないかと思ったのです。日が西の空に沈みました。今日はここまでと決めて、ねぐらをさがしました。ちょうどよい穴を見つけました。ここならぐっすりと眠れるわ。
眠ると、夢神がわたしの夢にやってきました。
「あさぎ、むだなことはおやめ」
美しい夢神は言いました。
「目覚めの草は、あなたなんかには見つけられないわ」
「あなたはどうして姫の夢に入るのですか」
「どうしてって言うのは方法という意味？　目的という意味？　キツネはバカだから言葉の使い方を知らないのね」
「目的の意味です」
「眠り姫の夢がおいしいからよ」
「姫の夢を食べているのですか」

「キツネの夢なんか食べる気にもならないわ。まずい」
「全部食べてしまうと、姫は」
「死ぬの。だから、あさぎは目覚めの草をその前に見つけないとね」
「目覚めの草はどこにあるのですか？」
「知らない。知ってても教えてあげない。あんなにおいしい夢はないんだから。それもずっと眠っているんだから、濃厚な味なのよ」
夢神は舌なめずりをしました。夢から覚めると、目の前で小さな雫がはじけました。夢神が帰ったのです。

二十　長老の村

今日も一日中かけたのですが、誰にも会いません。同じ所をぐるぐるまわっているのでしょうか？　キツネにだまされているのかもしれません。キツネがキツネにだまされる。でも、老いたキツネなら……。
「どうしたの？」
大木が声をかけてくれました。
「長老の村へ行きたいのです」
「もうすぐだよ。長老たちは時々ここまでやってくるから。お年寄が来るくらいの距離だよ」
「ありがとう、それじゃあ、一気に行くよ」
わたしは走り出しました。森を抜けると、ぼんやりと灯りが見えました。
道で年寄の猫に会いました。
「どこへ行くのかね」
猫が言いました。
「長老の村です」
「ここが長老の村だ」
長老の村は、老いた猫たちの村だったのです。猫は死を感じると、この村にやってきて、死を迎えます。

「でも、死なずに生きている百才の猫もいる。最長老様だ」
「聞きたいことがあるのです」
「わしが知っていることなら教えてあげよう」
「目覚めの草のことです」
「目覚めの草？　知らないなあ。最長老様ならご存知かもしれない。おいで」
猫は先に立って歩きました。猫屋敷は大きく、様々な猫が住んでいました。三毛猫、虎猫、黒猫、白猫。庭に面した廊下にならんでいます。最長老様の部屋は、廊下のつきあたりにありました。
「最長老様、お会いしたいというキツネをつれてきました」
「キツネか。退屈していたので会ってもいい」
最長老様は、巨大な三毛猫でした。小さな虎みたいだ。わたしは思いました。
「キツネか、珍しい」
しわがれ声ですが、堂々としていました。
「聞きたいことって何だ」
「目覚めの草のことです。生えている場所を知りたいのです」
「目覚めの草……。なぜ」
「姫を目覚めさせるためです」
「姫って？」
「眠り姫です」
「風の便りに聞いたことがある」
わたしは、姫が眠ってしまったことから、夢神のことまで話しました。最長老様は目をつむり、黙って聞いていました。時々ピーンと張った長いひげが動きました。
「ここにはない。人の世界にある」
「人の世界？　どうしたら行けるのですか」
「もし、人の世界に行けたら、いわしという魚を持ってくると約束するなら教えてやる」
「いわし」

「この世のものと思えないほどの珍味だと聞いた。森ネズミはあきた」
「約束します」
この約束でわたしが命を落とすことになるなんて、そのときは考えもしませんでした。
「時々、人の世界の猫がここに遊びに来る。そいつについていけば、行けるかもしれない。名前はタマだ」
「ありがとうございます」
わたしは、深々と頭を下げました。
わたしは長老の森を出ました。細い道をゆっくりと歩きました。時々まわりを見渡し、猫をさがしました。
タマがいました。
「ふん、ふん」
と、鼻を鳴らしています。
「タマ？」
「そうですよ。キツネの知り合いはいないけど……」
タマが答えました。
「君は？」
「わたしはあさぎ。人の世界へ行く道を教えてほしいの」
「森への道は、亜夢ちゃんの家の縁の下にあるの。おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんの、そのまたおじいちゃんのときの井戸なの」
「それが、人の世界と森をつなぐ道なの？」
あさぎは言いました。
「多分そういうことなのね。わたしは行ったり来たりできるの。行く道と帰る道が違うなんてややこしいことはない。でもあなたは帰る道は違うと思う。アマテラスはアリスにだまされて、およげないのにもどり川に飛びこんだけれど」
タマは笑いました。タマのひげがぴくりと動きま

した。
「君とは気が合うのかなあ。お喋りになったみたいよ」
とタマは言いました。わたしもタマが好きになりました。細い道をタマとわたしは歩きました。一匹しか通れないせまい道をぬけると、筒の底に出ました。
「井戸だよ」
タマが言いました。
タマは、なれた動作でつるべをつかみ、上がっていきました。わたしも苦労しながら上がりました。
「ついたよ」
タマが言いました。
明るい庭の光が、縁の下にもさしこんでいました。わたしが上がると、井戸はふっと消えました。

二十一　転校生

十一月。秋は深まり、イチョウ並木は黄金色にかがやき、風が吹くと落ち葉がかさかさと音を立てる。亜夢と良太と七海ちゃんは、黄金のじゅうたんを踏んで学校へ行く。学校に入ると一年二組の教室に入る。
亜夢の席は隣があいている。生徒が三十五人だから、誰かの横が空席になる。亜夢は少し淋しかったけれど、しかたがないと思っていた。でも、その朝、亜夢の横の席に女の子がいた。とてもかわいい女の子だった。
「おはよう」
女の子は言った。
「おはよう」
亜夢も言った。
「わたしは今田あさぎ。転校生なの」
「どこから来たの？」
「森からよ」
女の子はにっこりと笑って答えた。

「よろしくね」
亜夢が言った。
「わたしは亜夢。あゆめって言ってね」
「わたしもあさぎでいいよ」
亜夢は、すぐに仲良しになれると思った。
授業が始まるまで時間があったので、二人はもう少しおしゃべりをした。
「すきなものはおじいちゃんが作っているトマトよ。今はないけれど、夏が来たらいっしょに食べよう」
「楽しみだなあ」
「あさぎちゃんが好きなのは？」
「油揚げ」
「油揚げなの」
亜夢は朝のみそ汁に入っている油揚げは、あまり好きではなかった。ちょっと不思議な女の子だなあと亜夢は思った。

みんなが三角と言っている三叉路で、亜夢は良太と七海ちゃんと別れた。三人が別々の道を帰る。秋は夕暮れが早い。つるべ落としと言うんだよと、おじいちゃんが言っていた。「つるべ落としって？」と、聞くと、「ちょっと待ってね」と言って、コンピューターをさわっていた。
「これこれ、井戸から水をくみ上げるときにつかう桶のようなものなんだ。滑車がついていて、手を離すとするすると真下に落ちる。秋は夕暮れが早いことをたとえているんだよ」
その後、
「井戸もなくなったなあ」
とため息をついた。
「昔はこの家にもあったそうですよ」
おばあちゃんが言った。
今まで家の屋根の上に見えていた夕日が、カーキ色に空を染めて、落ちるように沈んでいく。
薄暗くなっていく向こうに、誰かが立っていた。

「あさぎちゃんだ。わたしの方がはやく学校を出たのに、いつ追いぬかれたんだろう……」
「亜夢ちゃん、教えてほしいことがあるの。いい？」
「いいよ」
「遅くなったら悪いから、簡単に言うね。目覚めの草って知っている？」
「目覚めの草。知らない。おじいちゃんに聞いてあげる。おじいちゃんはもの知りで、コンピューターも使えるの」
「コンピューター？　それじゃお願いね」
あさぎは走って帰っていった。
「不思議な子だなあ」
と、また、亜夢は思った。
晩ご飯の後、お茶を飲んでいるおじいちゃんに亜夢は聞いた。お酒を飲むと、すぐに眠ってしまうから。
「おじいちゃん、目覚めの草ってなあに」
「知らないなあ、おばあさんはどうかな」
「わたしも知りませんねえ」
「それじゃインターネットで調べてみようか。どっこいしょ」
と立ち上がった。
「ヒットしないね。目覚めの草という歌ならあるよ。プリントするね」
フリガナがふってあるので亜夢にも読めた。

眠り姫が目を覚ます。
目覚の草で目を覚ます。
永い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

二十二　音楽会への招待状

「おじいちゃんは知っていたの？」
亜夢が席につくなり、あさぎは聞いた。
「歌ならあるって」
「歌……。どんな歌？」
亜夢は歌を見せた。
あさぎちゃんは字が読めないのかなあ。さかんに首をふっている。
「歌って」
「どんな曲か分からない。歌うのは無理だわ」
「それじゃ読んで」
亜夢は歌を読んだ。

眠り姫が目を覚ます。
目覚の草で目を覚ます。
永い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

「ありがとう」
あさぎは教室を出て行った。でも、誰もあさぎを見た者はいない。
もどり橋は後ろ向きに歩けば、簡単に渡れた。何でも教えてもらおうと思ったらダメなんだと、あさぎは思った。後ろ向きに歩くなんて、すばらしい知恵だ。
あさぎは音の森にさしかかった。みんな音楽会の練習で忙しかった。
音の妖精なら知っているかもしれない。ラッパのような楽器から生まれた妖精にあさぎは言った。
「この歌を歌って下さい」
あさぎは事情を説明した。
「人間の歌は人間にしか歌えないよ。でも、曲の演

奏はできるよ」
不思議な楽器から曲が踊り出た。
♪　♪　♪　♪
「亜夢ちゃんなら前にここに来たことがあるよ。音楽会の招待状を書いてあげよう」
妖精は言った。

音の森の音楽会への招待状

亜夢ちゃんへ
目覚めの草の歌を練習しておいてね。曲はあさぎちゃんに教えておきます。

音の妖精より

あさぎは笛で曲を一生懸命練習した。
♪　♪　♪　♪　♪
♪　♪　♪　♪　♪
タマはおばあちゃんの膝の上で、気持ちよさそうに眠っていた。タマは音楽会で亜夢ちゃんの歌を聞いていた。これは明日の出来事なんだ。
校舎の裏から笛の音が聞こえてくる。
ぴーぴーぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーぴーぴーひょろ
ぴーぴーぴーひょろ
あさぎが笛を吹きながら踊っている。

笛に合わせて亜夢が歌う。

眠り姫が目を覚ます。
目覚の草で目を覚ます。
永い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

「合わないなあ。声はすばらしいのになあ。亜夢ちゃんって、ひょっとしたら音痴？」
「そんなこと言うならもう歌わない。七海ちゃんにでも頼んだら」
亜夢は、ぷいっと横を向いた。
「ごめんごめん。機嫌を直して。招待状は亜夢ちゃんにきたのだから、七海ちゃんじゃダメなの」
亜夢も気を取り直して歌う。やっとうまく歌えるようになった。亜夢の声はのびやかで鈴をふるように美しい。七海ちゃんにも負けないかもと、亜夢は思った。
暗くなってきたので、亜夢はあさぎと別れて夜道を急いで帰った。明日は日曜日だ。あさぎちゃんが迎えに来ると言った。

二十三　音の森の音楽会

あさぎは昼すぎにやってきた。
「あさぎちゃんと遊びに行くね」
おばあちゃんには、友達の姿が見えなかった。
二人は並んで森の方へ歩いていった。
「門番に招待状を見せれば通してくれるよ」
あさぎは言った。
「門番って？」
「大きなキツネ」

あさぎが答えた。森に着くと、
「亜夢ちゃんはここから。わたしはもどり橋から森へ入るわ」
とあさぎが言った。一人で行くのが心細かったので、
「一緒に行こう」
と亜夢は言った。あさぎは首をふって悲しそうな顔をした。
「森に入ればすぐに会えるわ」
あさぎはそう言って、かけだしていった。
森に入ると、音楽が聞こえた。大きなキツネが道をふさいでいた。招待状を見せると、
「楽しんできな、俺はいつも留守番だ」
と、門番は悲しそうに言った。
「ここでも聞こえるように、大きな声で歌うわ」
亜夢が言った。
「やさしい子だなあ。がんばれよ」
門番は目を細めて言った。
亜夢は音楽の方向にいそいだ。途中であさぎが待っていた。
「行きましょう」
あさぎが言った。
音楽がだんだん近くなる。会場に着いた。受付で招待状を渡した。受付係は白い猿だった。
「楽しんでね」
猿は言った。
舞台では華やかなマーチが演奏されていた。不思議な楽器から飛び出す音の妖精が、舞台いっぱいに飛びまわっていた。小さな子供は、カスタネットみたいな美しい貝殻をたたいた。タン、タン、タン。老人が吹く大きなまき貝のような楽器。ブォーブォーブォー。美しい女の人が弾いている虹色のピアノみたいな楽器。時々ふたが開き、バリトンの歌が飛び出す。
「すごいなあ」
亜夢は歓声をあげた。音楽が終わると、舞台中央

に、きじみたいな鳥が出てきた。
「今日はすばらしいゲストをお迎えしています。人間界から来られた、亜夢ちゃんです」
ものすごい拍手だ。亜夢は舞台中央に立った。客席の後ろの方に、美しいキツネが亜夢の方を見ていた。落ち着くように亜夢は大きく息を吸い、歌い始めた。

眠り姫が目を覚ます。
目覚の草で目を覚ます。
永い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

亜夢の歌声は山や野を越え、眠り姫の家に届いた。眠り姫はゆっくりと目を開けた。ヨモギは腰を抜かした。
「姫が目を覚まされた」

二十四　約束

亜夢の歌が終わっても拍手はなりやまない。
あさぎははっとした。約束を忘れていた。あさぎは急いで会場を出た。最長老に魚を持って帰る約束だった。いわしを持って帰らなければ、わたしは命を落とす。猫たちは許してくれない。姫は目覚めたのだろうか。後ろ髪を引かれながら、あさぎは必死に走った。
「あさぎちゃんを見ませんでしたか？」
亜夢は受付の猿に聞いた。
「さっき、ものすごいいきおいで駆けていったわ。亜夢さんにわたしのことを聞かれたら、先に帰ったって言ってねって」

亜夢は門番の所に来た。
「よく聞こえたよ。楽しかったぜ。ありがとう」
門番は言った。
亜夢はいつの間にか森の前に立っていた。
その頃あさぎは商店街にいた。魚屋があった。人間になる時間も惜しかった。あれがいわしだ。すばやくかけより、魚をくわえた。だが、あさぎがくわえたのは、いわしではなくてアジだった。お店の人は、小さなキツネがアジをくわえて、逃げていくのをぽかーんと見ていた。
「キツネだ。キツネだ」
商店街は大騒ぎになった。あさぎは逃げた。約束は守らなくては。
ヨモギは、あさぎが帰ってこないのは、姫の世話がいやになって逃げたのだと思った。だから姫には、あさぎのことを話さなかった。眠り姫は、あさぎのことを知らない。眠りから救ってくれたあさぎのことを知らない。最長老の猫の怒りをかって、かみ殺されたなんてもっと知らない。命をかけて姫を守ったのに。
美しい姫のうわさを聞いて、若様が姫をたずねてきた。二人は結婚して、姫は男、女、男、女、と子供を産み、幸せに暮らした。
月曜日にあさぎは学校に来なかった。亜夢のとなりはひっそりとしていた。亜夢は後藤先生に聞いた。
「あさぎちゃんは欠席ですか」
「あさぎさん？」
「転校生のあさぎさん」
「転校生なんていないわ」
亜夢はだまってしまった。
「亜夢ちゃん、どうしたの？」
先生の顔が前にあった。
「わたし……。多分夢を見たのだと思う」
「そうね、わたしも子供の頃は、夢と現実が分から

なくなることがあったわ」
後藤先生は亜夢の頭をなでた。後でこっそりと、良太や七海ちゃんに聞いてみても、あさぎのことは二人も知らなかった。
わたしは夢を見ていたと亜夢は思った。でも、目覚めの草の歌は覚えている。夢なんかじゃない。亜夢は心の中で叫んだ。

二十五　新しい町へ

学校から帰ると、お母さんと新しいお父さんが来ていた。
「生活も落ちついたし、それに、小さいながら家も買ったし」
お母さんが言った。
「ローンが大変ですが」
新しいお父さんは頭をかいた。
「亜夢の部屋も用意してるのよ」
お母さんが言った。
クリスマスのプレゼントもたくさんあった。でも、亜夢はうれしくなかった。
「正月に、つれて帰りたいの」
お母さんが言った。
「正月はいや」
亜夢が言った。友達にさよならを言えない。
「学校が始まってからの方がいいの？」
お母さんが聞いた。
「うん」
亜夢はうなずいた。やはりお母さんと暮らしたかった。
「そうするか。淋しくなるなあ」
おじいちゃんが言った。
「やっぱり、お母さんのそばがいいよ」
おばあちゃんがそう言うと、おばあちゃんの目から涙があふれ出た。

「おばあちゃんごめんなさい」
亜夢が言った。
「かってばかり言ってごめんなさい」
お母さんもそう言って泣いた。
「わたしも、いい父親になるようにがんばります」
新しいお父さんが言った。
その夜、みんなでクリスマスを祝った。
亜夢は「きよしこの夜」をお母さんと歌った。

きよしこの夜　星はひかり
すくいの御子は　御母の胸に
ねむりたもう　夢やすく

「亜夢は、歌がとても上手になったね」
お母さんが言った。
亜夢の声は、冬の夜空に美しいしらべとなって流れた。

年が明け、久しぶりに寒さのゆるんだ日に、
「お昼は外で食べましょう」
とおばあちゃんが言った。
「それもいいね。トマト畑も見たいし、畑で食べよう」
おじいちゃんが言った。
三人は、亜夢を真ん中に、ビニールシートの上に腰を下ろした。霜よけのわらの匂いが気持ちいい。おばあちゃんが作ったお弁当がとてもおいしい。おにぎり、卵焼、ウィンナー、レタス、みんな亜夢が好きなものばかりだった。
「土も春を待っているんだよ、亜夢」
おじいちゃんが言った。
「また帰ってくるね」
亜夢が言った。
「いつでも帰っておいで」
おばあちゃんが言った。

空を見上げると、二、三日前の凍るような空ではなく、どこまでも青い空だった。

二十六　閉ざされた森の神話

「亜夢ちゃんは転校します」

後藤先生が言った。亜夢は席を立った。何も言えなかった。先生が拍手をした。

「悲しいけれど、みんなで、亜夢ちゃんの門出を祝いましょう」

友達も拍手をした。亜夢はおじぎをくり返した。

「みんなありがとう」

そう言うと、涙がこらえきれずにあふれ出た。後藤先生も泣いた。女の子たちも泣いた。良太は泣きたいのにがまんした。

成人の日にお母さんが迎えに来た。

森の前を通った。結局、森には入らなかったのに、とてもなつかしい気がした。駅に着くと、良太と七海ちゃんが来ていた。

「手紙を書くね」

亜夢が言った。

「わたしも」

七海ちゃんが言った。

「俺も」

良太が言った。

新しい町での生活が長くなった今でも、時々、亜夢は森のことを思い出す。あの森の中には何があったのだろう？

平成二十五年五月二十九日（水）。